Graded Direct Method Association Of Japan
News Bulletin

第38号 **英語教授法通信** 1986年6月7日

編集・発行・GDM英語教授法研究会　事務局 〒112 東京都文京区目白台2-10-10 佐藤由美子方 TEL.(03)947-1276

子供のクラスを再び持って

東山　永

English through Pictures（以下 EPと略す）で凡その基礎ができたA男が中学生になった。ある日ふらりと来て云った。中学校の英語は正しい文章でないような気がすると。文になっているけれどつながってないからという。そしてテーブルの上の箱を指して、こゝで習った英語では **This is a table. This is a box. This box is on the table. It is shut. What is in the box?** と云うけれど、学校のは **This is a desk. This is a box.** それだけでつながりがないという。

私が成人クラスを持つようになって小、中学生とのつき合いが10年近くなかった。従ってその間中学校の英語教科書を見ることもなかった。毎年6月の公開講演会には学校教師が多数参加することを考え、GDMの授業の見方を話す為に学校英語とのちがいなどしらべることにした。ある検定教科書を手にした時、その余りにもひどいのに驚いたというより怒り心頭に達したのである。いくつか例を挙げてその怒りを大勢の前でぶちまけた後のすっきりしたこと。しかし学校の先生は大変な問題を抱えて悩み苦労していることでしょう。学校英語の中にどのようにGDMをとり入れられるかを考えるのがこの号のテーマらしいが、学校で教えた経験のない私には何も云えない。それは山田さん箕田さんその他の経験のある実践者にお任せする。

今回あらためて3種類の検定教科書を手にしてまたもや溜息がでるばかり。偉い方々が監修者、編集委員、校閲者といかめしい名称でその名を列ねている。それなのになぜ？GDMと学校英語のGradingはちがうかもしれない、それぞれの教科書の重点のおき所も

目次●

子供のクラスを再び持って …… 東山　永 1
GDMが子供に与えてくれたもの …… 安江　祐子 2
教科書とGDMの接点を求めて …… 箕田　兵衛 6
GDMのカーEPから教科書への橋渡しをやってみて… 川上伊都子 8
メディア史上のBasic English (1) …… 片桐ユズル 14
GDM関西で20年 …… 斎藤　直美 17
新刊書紹介
活動報告

ちがう。しかし英語を外国語として教える場合どれにも共通した根本的なことがあるのではないだろうか。

EPではI，Youではじまる。私の見た3冊の教科書では、I，You は同じレッスンに出ているが、いづれもmy, yourより後に出るし、その中のひとつはひどい使い方である。その教科書の$\frac{1}{3}$位進んだ所で、しかも仮空の話の中で教えられる。Iは人間の女の子でYouはある動物であり、次のI am a man.は、絵によれば頭と胴体がひとつになって卵のような形で、それに手足がついている奇妙というより気味悪いものである。

名詞、形容詞、時制などなど際限なくひどい感じである。GDMで教えるいちばん大事な語がいかに粗末に乱暴に扱われていることか。

A：I don't like Friday. Do you like *yesterday* ?

B：*yesterday* ?

A：yes. It's the name of a beautiful song.

こんな会話がBook I(p.59)でできるくらいならFriday is the name of a weekly magazine. と云えるはずである。このような例を挙げるのはこのへんで止す。結局現在の検定教科書を使いながらその中にGDMをとり入れるのは不可能であろう。ふつうつまみ食いと云ってある語を教える時にGDMの導入などうまくとり入れることはできるが。

この2、3年GDMセミナーや月例会で見た子供のクラスで感じたことのひとつに、出来すぎるのではないかということがある。中学校の参観授業などでは、生徒が声をそろえて文型練習などしていかにも活気があるように見える。これに近い感じで、出来すぎる。大勢の大人、しかも殆どがGDM教師の前でのことであるから、子供に活潑にと望み、文も正しくと先生は意気込むのは当然である。そしてその為の準備が必要となる。しかし研究会の為でないふだんのクラスは決してカッコイイものではない。はっきりしないもたもたしたものである。 生徒ひとりひとり眼を輝やかせているが語、文の意味を摑むまでは、はっきりしない。声も小さい。しかし大事なことは摑んでもらえるという希望を持ってクラスを進める。

今、私が教えている子供7人のクラスの授業時のこと、K男が何やら長い筒のようなものを担いで来た。ヴエランダで星空を見るわけである。〝それなあに？〟〝This isてんたいぼうえんきょう。〟〝誰の？〟〝It isかぞく's〟 なるほど。授業中はもたもたして声も小さいのに、Directにからだでしっかり習得した時、おとなには考えもつかない文が、殆ど正しいかたち、音、リズムを伴って出てくる。

学校英語に毒されないうちに、そして子供の不必要な負担を少しでも軽くと思って、EPではじめたGDM初期の生徒が育ち、そしてその子供達にもまたGDMで教えることができるこの頃の私の喜びは測り知れない。

心から願うことは子供達の自由な発想、表現がGDMの英語で伸びていくことである。

GDMが子供達に与えてくれたもの

安江　祐子

この一年間、中学一年生を教えてきました。今回は2学期末まで GDMで教えようと決心し、検定教科書は使わずEPのBook Iをプリントの形でテキストとしました。47人のクラスを3つ、週に4時間の授業です。学校行事の雑務の波に押し流され教材のネタ切れ、発想の貧困化などで何度も何度も壁にぶつかりめげそうになりました。〝もうそろそろ検定教科書にもどって日本語で説明しようかな・・・〟と思ったこともあったのですが、生徒達がいつ頃からか、自主的に提出してくるようになったノートの中に、みごとな自由英作の作品を見つけそのたびに、子供達の中

で確実に英語が生きた言葉として息づいていることを痛感し、まだまだがんばってみよう、せめて今週だけでも、あと1時間だけでも…と息も絶えだえにGDMを続けてきました。最終的に2学期終了時点で Book Ⅰの半分p.57までしか進みませんでしたが、春から9ケ月の指導の中で驚くほど意欲的で積極的な姿勢が生徒達の中に養われたこと、さらに自分の言葉として物事を英語で表現していく力が着実についてきたというすばらしい成果が目に見えてあらわれてきました。もちろん公立中学校に比べると私学の場合、入学試験を経て集められた生徒だけに、ある一定のレベルがそろっており、〝英語〟に対しても入学時から興味を持っている子供が多いので、レディネスの段階からすでに恵まれていると言わざるを得ません。 ただ、私自身がGDMを始めてまだ日が浅いこと、p.57まで教えるのも初めての体験だっただけに1時間1時間がまるで実験台にのせられたモルモットのようで、ドキドキハラハラの連続、授業が終って〝バンザイ！〟と叫びたいほど感激する時とチャイムがなっても不可解な顔で不安げにノートを見ている生徒達を前にしてガックリする時など、本当に大きなチャレンジの9ケ月だったように思います。

小学校の頃に塾に通ってすでに英語を知っている子供達が多いのには驚きました。ただこういう子供達にとっても、GDMの教え方はかなりショッキングなようでした。自分の目でしっかり判断し自分の頭を使って考えるだけに、一度その概念が定着すると驚くほど自然に言葉を使い分けてくれるのです。2学期になって One of the balls is green . Two of them *are* white . という文章を練習した時、何が主語になっているのか、またそれが単数であるか複数であるのかがきちんと理解できて、ほとんどの生徒がまちがえずに発言したのにはびっくりでした。（今まで高校生を教えていてもballsの－s にひきずられる子は多かったのです）

3学期にはいってから、初めて検定教科書に戻りました。まだまだ学校全体としてGDM教授法を中学校に定着させていくという方向には至っていないので、同じ学年を持上れない場合のことも考えて一年生のまとめとして、検定教科書も仕上げることにしました。単語の他に文法としても、EPでは扱っていないものが出てきますが、少し説明を加えるだけで、ほとんどリーディング教材として扱うことができました。ただそれまで機械的な練習がやや少なく、特に疑問文・否定文を作る練習を徹底させる際、一般動詞として扱ってきたものが少なかっただけに、教科書で急に多くの動詞に触れても、同じルールで書き換えていけるようになるまで少し時間がかかりました。それまでにも、プリントなどでかなり練習をさせるよう配慮していたつもりですが、やはりテストになるとうっかりミスが目立ちました。その反面、感覚的に

〝will ～〟 → 〝～ ing〟 → 〝past〟という動詞の流れ、そしてもう少し抽象的に習慣的な状況説明で現在形が使われているということが抵抗なく理解できたようで、2年生で時制について学んでいく時、かなりスムーズに理解できると思います。

4月から英語通信を発行し、連絡事項やメッセージなどいろいろ記事を載せていたのですが、5月頃、2～3人の生徒のノートからいくつか作品を紹介したのがきっかけとなり授業が終ると自主勉強のノートを提出する子が多くなりました。授業で習った表現を使って自由英作をしてくるのですが、マンガや雑誌の切り抜きに文をつけたり、家族の写真を貼って紹介文を書いてくるもの、最近では新聞の切り抜きで〝スペースシャトル爆発〟について、〝アキノ夫人〟の勝利の写真をつけてきたみごとな作品もありました。ほぼ毎時間発行するペースで、とうとう100号を越えました。宿題でもないのに授業が終るなり教壇の机へ飛び込むようにして 〝こんなにやりました！〟とノートを持ってくる子が増

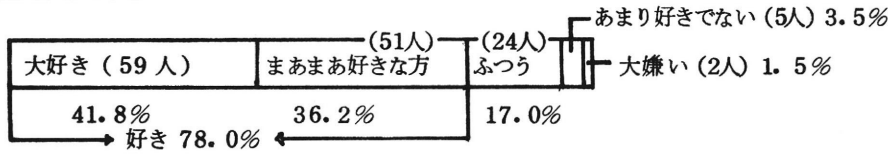
え、毎日山積みのノートの中で嬉しい悲鳴を上げていました。英語通信に載せきれないほどのすばらしい作品を目の前にすると、子供達のこの学習意欲、伸びていきたいという願い、〝学びたい〟〝知りたい〟という知的欲求を大切にしなければならない・・・と強い責任を感じます。たとえテストの点数が悪くても〝英語の授業は楽しい〟〝英語が好きだ〟といえる子供達を育てたいというのが私の一番の願いです。生徒達の多くが、この一年間の中で小学校の塾づけの受身の勉強体制から、やっと自分の頭で物を考え、本当の勉強とは何かということがつかめてきたようです。GDMが育ててくれるのは、そんな人間として一番大切な〝生きる姿勢〟ではないかと強く感じました。

GDMから検定教科書への移行についてはその時期、方法などさらに具体的に検討していかなければならないと思っています。ただ〝GDMならこんなに文法的に多くのことを学べる〟といった量的なものよりも、学ぶ姿勢、考える力、自己表現への欲求という基本的な学習姿勢が無意識のうちに生徒の中に根づいたという点で、何にも替えがたいものをプレゼントすることができたのではないかと思っています。

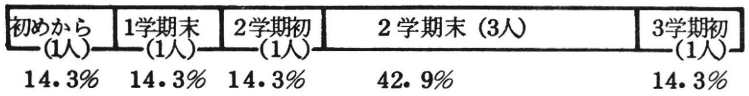
（付記） 一年間の授業を生徒達はどう受けとめたか、アンケートをしてみました。その集計結果の一部を記載致します。子供達にとって英語の授業は〝楽しいが難しい〟というイメージがあるようです。3の質問では、ア・イの副教材的なものを除いて、カが6割以上を占めています。GDMでの授業の進め方がやはり生徒にとっても好感のもてるものであることが数字の上からもはっきりわかります。

✡ 1986 中1 アンケート 集計結果 （生徒141名対象）

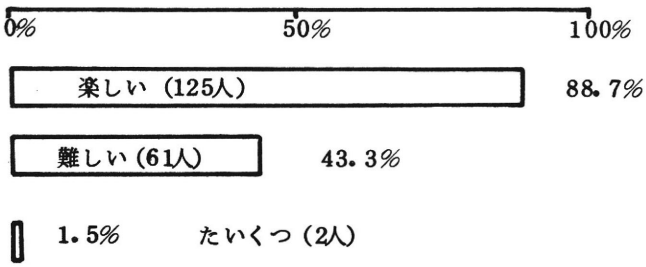
1. 英語が好きですか



（あまり好きでない、大嫌いの人のみ）いつごろそう感じるようになりましたか



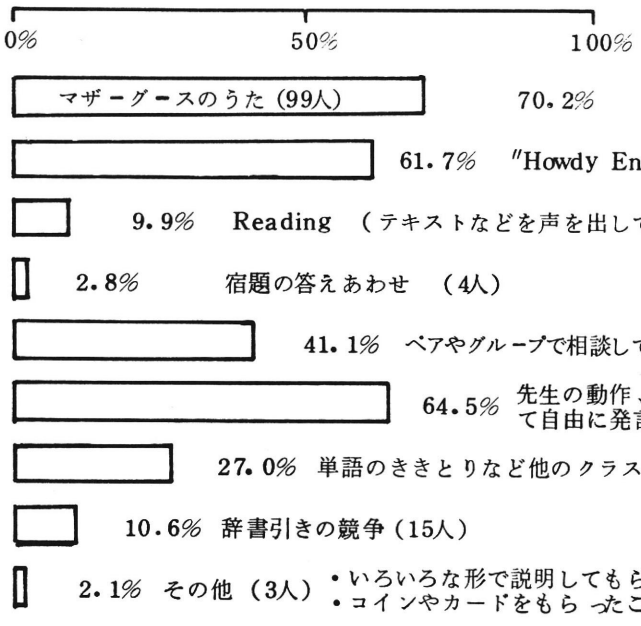
2. 英語の授業はあなたにとってどんなイメージですか （2つ○をつけてもよい）



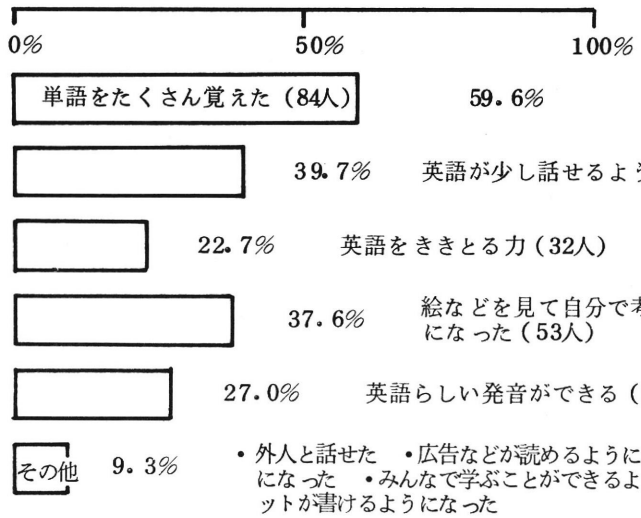
エ　4.3%　疲れる（6人）

オ　1.5%　その他（2人）　内容によって違う　意欲的である

3. 授業でやってきたことの中で、特によかったと思われるのは次のどれですか（3つに○）



4. 一年間英語を勉強してみて自分自身特にどんな力がついたと思いますか（2つに○）



教科書とGDMの接点を求めて

ー動詞を中心にー

箕田　兵衛

現在使っているNew Horizon （以下NH）の1年の時に学習する動詞をどのように導入したらよいかを考えてみたい。現在の学校では学年末に実力テストという名の教科書ベッタリテストをやるので、動詞以外はGDMでやりながら使えるが、動詞はGDM的に導入するしかない。この導入は途中に投げ入れ導入をすると混乱するので2月にやることにしている。4月から翌年の1月までEP Book Ⅰの90ページ前後まで進むので、そこまで学習したことのどこと関連させるかが大切だと思う。NHとGDMがダブッている語は、

be, have(has), do(dose), take, go, come, make, see, say, get

で、takeは take～to, getは get upで出てくる。

NHには出ていないがGDMで導入されている語は、

put, give

NHだけに出てくる語は、

like, thank, play, study, want, eat, know, practice, can, skate, ski, swim, stand, look, read, sit, sing, let, leave, start, work, help, wash, listen, drink, smile, talk, write, call, walk, watch である。

want の導入

NHではI like baseball. が初出である。give の review をかねて、外国のコイン、問題集（今年はなぜか人気があった）その他ほしがりそうなものを次々に見せて導入する。

T：（コインを見せる）

P：Those are coins. They are in your hand.

T：（P1にコインを1個見せる） This coin is from～?

P1: It is from France.

T: I will give this coin to you.

P1: No. You will give that book to me.

T: You want this book. I will give it to you. Who wants this coin ?

P2: I want that coin.

be from や who, what, which where などの疑問詞も既習の語であるのでここで復習できる。

like, play, study の導入

NHではそれぞれ I like baseball. Do you play tennis ? I study math every day. が初出である。GDMで be ～ing 形はやっているので、絵を使って導入する。

T：（野球をしている絵を見せる） They are playing baseball.

（アメリカン・フットボールをしている絵を見せる）

P：They are playing American football.

そのほか basketball, volleyball tennis などスポーツをしている写真か絵を見せて練習する。

T: They like American football.

（絵をテーブルにおき）You saw a picture of American football. Do you like American football?

P1: Yes, I do.

see の導入で Do (Did) you see ～? I see (saw) ～.を復習しながらやるとわかりやすい。

T: What sports do you like ?

P：I like tennis. などもできる。
T：（数学をしている絵を見せる） They are studying math. いろいろな科目を勉強している絵を見せる。教室にある予定表を見ながら
T：You have nine subjects. Japanese, social studies, math, science……
Now you are studying English.
（P1に）Do you like math ?
P1: No, I don't.
T：What subjects do you like ?
P1: I like music.

can, read, write
skate, ski の導入

be able to はBook Ⅱなので、未習であるが利用できる。まず do, see, say の review とあわせて導入する。
T：（あるやゝこしい動作をして）
Do this with your hands ?
（P1 を見て）Oh ! you can do it.（P2 に）Can you do it ?
P2: No.
T：No, you can not.
T：（小さな写真、絵を黒板にはり、一番後の生徒に）
This is a picture of ～.
Can you see it ?
P1: No, I can not.
T：（P1のそばに持っていく）
You can see this picture.
P1: I can see this picture.
T：Peter Piper picked a peck of pickled pepper.
Can you say this ?
と早口言葉を言わせる。日本の早口言葉も利用できる。
T：（handkerchief というカードを見せる）
Can you read this word ?
P：No, I can not.
T：（ハンカチを取り出し）handkerchief.
（カードをテーブルにおき）
Can you write this word ?
P1: Yes, I can.
その他、実物か絵に書けるような外来語を利用するとわかりやすい。
例．scissors, dynamite, encyclopedia, pyjamas
T：（スケート、スキーをしている絵を見せる）They are skating(skiing).
（絵をテーブルにおいて）
Can you skate(ski) ?
P1: Yes, I can.
P2: No, I can not.

命　令　文

You will ～ をとってしまえば命令文になるので既習の語を使えばわかりやすい。
T：（P1 に）
You will go to the door, P1.
P1: I will go to the door. I came to the door.
T：（You will）Open the door.
Shut the door.
何人かの生徒に次のような動作をさせる。
Stand up.
P2, Go to the board. Write your name on it in Romaji. Go back to your seat.
P3, Please take your book off the table. Open it to page 35. Read them. Shut your book. Put it on the table.
P4, Give your eraser to me. Thank you.

P5, Look at the clock on the wall. What is the time?

このほか一日の生活で絵を見せながら、get up, wash, eat, drink, leave, walk, start, go home, watch TV, go to bed などを時間の reviewをしながら導入する。Let'sは命令文の中で一緒に出来る動作をしながら導入する。たとえば、Let's go to ～. Let's sing a song. など。まだ know, practice, work, help, listen, call, smile, talk があるがこれらの語は 翻訳の練習に使っている。 たとえば、

私の父は駅員です。

My father is a station employee.

My father works in the station.

駅員であることは駅で働いていることであるというように母語の内容をよく考えさせて書かせるようにしている。

命令文の導入でも生徒は黙って動作をするだけでなく、

T：Go to the table.

P1：I will go to the table.

P：He will go to the table.

のように生徒全員が自分の立場から発言している。2月から3月初めにかけ、わずか1ヶ月足らずでこれだけの内容が出来るかという疑問をもたれる人が多いと思いますが、生徒には教科書の内容をまとめてやっているので、自分でも読んでおくように言っており、GDMで積極的に言う習慣がついているので、それほどワカラナイという生徒はないようです。幸いに学年の全クラスを教えているので、デキナイところは全員がデキナイということでうまくいきます。塾に行っている生徒で教科書をやっている生徒は有利ではないかということもありますが、1年をすぎるとそれほど差はありません。イヤイヤながらよりオモシロイと思ってやっていることが大切です。

GDMの力

－EPから教科書への橋渡しをやってみて－

川上伊都子

はじめに

京都YMCA小学生英語科では、中学英語へのスライドがより易しくなるのではないかという考えから、それまで使っていたEPをやめて、中学の教科書NEW HORIZON Book Ⅰ（以下NH）を基にして、京都YMCAのoriginal text（以下 Y text）[注)1]を作った。教え方に関しては、講師に一任するという事だったので、direct method にこだわる必要はなかったかも知れないが、私は日本語を使わずに教えてみることにした。1983年4月から、1985年3月まで2年間、このY text で教えてみて、EPとはgradingもcontent wordsもかなり違うので、全ての内容を日本語なしに教えこなすことができるか当初は不安だったが、予想以上に多くの事柄を教えられたし、ふだんGDMの授業では教えないことも、充分に教えられるということにあらためて驚いた。本文では、この経験について報告してみたい。以下、〝どういうgrading〃で〝何〃を教えたか、時間を追って述べようと思うがgrading を考える際〝directに教える為には、何から先に教えればいいか〃という事を最も重視し、次に、Y text の grading に準じた。故に、Y text にもNHにも出てこないが、この理由から教えた items がかなりある。Y text では、NHに出てくる文型は全て含むが、grading は多少前後している。content words に関しても違いがあるので、それらを表にして、Y text、NH、さらにEPとの比較を試みたかったし、

teaching procedure に関しても一覧表にしたかったが、紙面の都合でできなかった。読みにくい所は、御了承いただきたい。

【クラスについて】

対象：　8名　小学5年生の4月から6年生の3月まで2年間

授業時間数：　60分　週2回

1年間72時間×2年

【Teaching Procedure】

——1年目——

［1時間目～34時間目］

始めの間、Y textは生徒には持って来させなかった。この間は純粋にGDMの授業である。EP p.1, I, You からEP p.15 の put までgrading もそのままである。本がなくてもreading やwriting に関しては、各授業内容にあったものをその都度work sheet として作ったので問題はなかった。take／put についてはY textには出ていないが、先にも述べた様に direct method で教える場合、一般動詞では最も示しやすいと考えたので、教えることにした。又、時制についても、be 動詞、一般動詞の全てについてはYtext、NH共に未来形、過去形は出てこないが、同じ理由から3時制で教えた。

［35時間目～45時間目］

EPのgrading でいけば put の次はwas であるが、ここではY textにあるgo／comeを先に入れた。2つを一緒に教えるのでなく、go（3時制）にto、from の他、at、go back等混ぜながら学習して3時間費し、was／were を take／put のreview と兼ね合わせて4時間、その後でcome（3時制）を入れた。goがよく定着しているとcome は非常にスムーズに入る。

続いてY text でcome と同じページにある sit down／stand up を入れた。先にup／down を黒板に矢印で示したり絵でgo up／come down等練習しておく。生徒達は一般動詞であれば、3時制が当り前と思っているので、sit／stand も3時制で入れた。T（教師）はイスの前に立ち、座ることを示してT〝I will sit down.〃座りかけて途中でとめれば、Ls（生徒達）の方からLs〝You are sitting down.〃が出てきた。T〝I sat down.〃も入れた後で、Y text には〝Sit down.〃の命令文の形で出ているので、You will sit down. の［You will］が落ちてsit→Sitになるということを黒板にかいて示せば、命令文も納得した。又、既習のtake／put, go／come についても、生徒に指示する場合には［You will］は省略して言うようにしていたので、生徒達の耳にも慣れていて、ここであわてなくてすんだ。

［46時間目～56時間目］

What is $\left\{\begin{matrix}\text{in}\\\text{on}\end{matrix}\right\}$～？→ What is $\left\{\begin{matrix}\text{this}\\\text{that}\end{matrix}\right\}$？→Yes-No questionに入った。又、この時複数形の these／those, they 等もこれらの疑問文でreview した。

これらが充分使いこなせる様になった後Who～？を入れた。ここでもYes-No question をあわせて練習する。Who～?の練習では、Y text の登場人物達の絵を使ってLs 同志でよく練習できた。

［57時間目～69時間目］

Who～？で人の名前に敏感になっていたので 's は効果的に入れることができた。知らない人物の絵を見せると必ず、〝Who is that？〃とLs はきいてくるので、その名前を教え、その後それらの絵をふせて、今度はその人物達の持物だけを見せ（同種の物を使う。例えば、bagの絵ばかり何枚か見せる）、1枚を示して T〝This is Jane's bag.〃と言えばLsは他の bag

の絵について誰の物であるか当てようとして 's を盛んに言ってくれた。これと同じ様にして、Whose ～？も入れることが出来た。Ytext にはないが、EPにならって、 a woman's , a man'sという形も入れた。

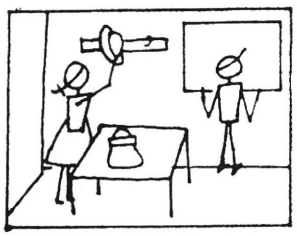
この期間に入れた語は他に、 family (father, mother, etc.), young／old, big／little, their／our, nine／yours／his／hers, 体の部分 (nose, eye, leg etc), itsがある。

又、特筆したいのは、初めて speaking test をしたことである。

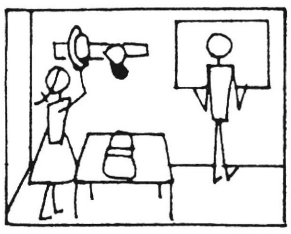
○ テストの方法：1人づつ個室に呼びTと向いあって座らせる。

テスト（A）——よく似た絵を3種類、それぞれ2組づつ作る。1組をTが持ち、他の1組をLに持たせる。Lは、その3枚の中から1枚を選び（Tには見せないで）、その絵について、英語で説明する。（まぎらわしい部分がある時はTからLに質問する。）TはLの説明をきいて、自分の持っている絵の中から1枚を選ぶ。Tの選んだ絵がLのものと同じであれば、Lの情報伝達は正しかったと分る。

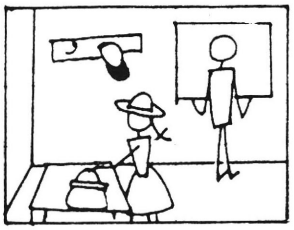
picture A



picture B



picture C



（テスト(A)に使った絵）

テスト（B）—— 'sやWhose ～ ？の時に使った絵で、Who is she? Whose bag is this ? Is this Jane's bag ? などの質問をTがし、Lが答える。これらを録音し、答えの正否の他、発音、発話スピードなどを観察した。（このテープについては西日本支部月例会で発表した。）

［ 70時間目～72 時間目］

its の review から has／ have, no +nounに入った。GDMでする様にhas／have の root senseから、手に持ってるもの ⟶ bag 等の中に持ってるもの ⟶ 家に持ってるものと広げた。NHでは私が考えるroot sense となる has／have は導入されず、p. 25 Mike has a pet . p. 26 I have a tape recorder. It has a radio. がいきなり出てくる。これらでhas／have の意味を理解させるのはかなり難しいと思われる。因みに、 takeについてもNHでは、p. 51 Do you take Koro for a walk every day ? I usually take him to the park . が初出である。

—— 2 年 目 ——

［ 1時間目～19 時間目］

has／have をさらに広げた。 How many + have ?に入る用意として、many／some, そしてdo／does を導入した。do／does はGDMではsee で入れるが、

Ytext では、NHと同じくhaveで出てくる。動物、昆虫などで has／have の review をよくした後、T〝Does a bird have a tail？〟に対してLsから〝Yes〟という答えがすぐ返ってきた。Tのquestion にYes, it does. No, it doesn't. という短い答えの形を充分練習してから、A bird doesn't have four legs. It has two legs. という否定文の形を教えた。Q&Aの練習には、机の足の部分が隠れている絵を数枚使って、Ls同志でDoes this table have three legs？ Yes, it does./No, it doesn't. 等、やってみた。

助動詞の有無による動詞の変化については、すでにbe 動詞や3時制の変化について自分達でその変化の規則を発見しているので、非常にsensitiveになっていて、この最も中学生がまちがう has → does + have → has の変化を、彼らは簡単に受け入れ、すぐ使いこなしてしまった。次に入れた sees／seeで、このdo／doesの練習はさらによく出来た。

この期間に導入した他の文型は、 How many legs (windows) does it (this room) have？ How many brothers do you have？ What do(does) you (she) see？ etc.である。

［ 20時間目～34時間目 ］

There is／are 構文は、 over／under／between etc. やany（疑問文、否定文）とで、広げて教えられた。場所についてsensitiveになっているのでWhere ～?を導入した。答え方をLs は沢山知っているので、この様な疑問文に入った時に Ls同志で活発に文を作り出せた。between／at が入っているのでWhat time is it now？ を導入した。時間の感覚がよく付いてきたところでbefore／after (prep.) を入れた。ここでは、季節、曜日、月の名等を練習した。既習の構文を使って、 How many days are there in April？ 等のreviewや When is spring (your birthday)？ It is from March to May (May 5th)。でWhen ～？ を入れて練習した。

［ 35時間目～44時間目 ］

before／after (prep.) → conjunctionに広げた（Ytext, NH 共に出ていない）。又ここでは、 before／after (conj.) を活発に利用できる様に、When + did ～？ を入れた。T〝When did L1 go to the table？〟
Ls〝She went to the table after she put the bag on the seat.〟等のQ&Aである。go／come のreviewと共にinto／out of／through (Y text, NH共出ていない）や had を入れた。
before／after (conj.) については、子供は大人と違って非常に楽に使いこなした。同じwork sheetをこのクラスと、他の成人クラスとでやらせてみたが、誤答に関しては、成人の方がひどかった。

［ 45時間目～51時間目 ］

この2年間で最も難しいと思ったのが、動作動詞のsimple present である。Y text でもNHと同じくget up／go to school／eat breakfast etc. 全て、simple present で出ている。 Lsは tense の概念が身に付いているので、とてもこれらの動詞をそのまま導入できない。そこでやはりEP BookⅡ にならって、太陽で導入してみた。GDMでする様に、

〝Yesterday the sun came up at ～。
Today the sun came up at ～.
Tomorrow the sun will come up at ～.〟

カレンダーで毎日をさして〝Everyday the sun comes up.〟でeveryと共にsimple present を導入した。〝What time do you go to bed？〟等不用意

な質問をしようものなら「曜日によって寝る時間なんかちがうもん」と横を向かれてしまう。〝every Saturday〟と付けて初めて〝I go to bed at 11 every Saturday.〟と答えてくれるのである。これは嬉しい驚きであった。又、simeple present での3人称の動詞の変化も、has／have 等で習ったことなので自然に出来るようになった。future, past, simple present の3時制を、助動詞 will, did, do／doesと共によく練習した。例えばP13の work sheet である。（A：答えを見てそれぞれの疑問文を作る。B：黒板にはった絵（動作と時間を表示）を見て、文をかく。）

［52時間目～61時間目］

play, listen, sing, ride, study 等の動詞は、写真等で what is he doing? He is playing baseball. と楽に入れられた。Let's はどういう風に入れようか迷ったが、Lを1人前に出してウォークマンで音楽のテープをきかせる。他のLs が興味を示したら、T〝Let's listen to the tape together.〟で入れた。同じくLet's sing the song. Let's read the book. 等授業中に出来るだけ使ってみた。like は、T自身の好きなものを使って導入したが、Lsに〝Do you like cats?〟等ときいても〝まあまあ〟とか言われるのでvery much を付けて練習する様にした。

他に動詞では、make（make + noun + adj., make + noun + verb）をGDMと同様に入れ、How old are you?thing／person 等もここで入れた。

［62時間目～72時間目］

canはEP BookⅡにある be able to と同様に導入した。drive, skate, ski, run, write 等を一緒に入れて、又 do／does も review しながら、練習をふくらませた。of, 序数詞を入れたあと、Which ～?と relative which（Y text にはどちらも出ていない）をしめくくりに入れた。これはGDMで行う通りである。

最後に筆記体の練習をして2年間の課程を終了した。

おわりに

この2年間を振りかえってみると、やはり〝GDMの力〟に対する驚きに他ならない。それは、「英語の授業は、〝英語を教える〟のが目的であって、〝教科書を教える〟のではないことは、明白な事実である」[注)2]ことをふまえた上で、EPを text として選べる自由を持てない時に、どれ程GDMという教授法の理論が、EPの枠を越えて私達教師の力となってくれるかということである。

「動作をする人の人称や数によって異なったことばを使いわけること、現在行われている動作と、未来、過去、の時の関係で、それぞれ異なった表現があることを発見している。これを文法的な用語を使ったり、規則として説明することはできなくても、その意識の中には、上述のことが自然にできている。（中略）すなわちこのような変化に対する潜在的な readiness ができていると言える」[注)3]この学習成果の素晴しさは、初期の英語学習にとって何にもかえ難いものであり、これこそ教師が最優先するべきものではないだろうか。それぞれの教室現場で、EPを使いたくても使えない人達が多くいると思うが、GDMの力を借りてなんとか工夫していただきたいと思う。この報告が少しでもそういう人達の役に立てば幸いである。

注)1 奥村裕子，
ABC in English
（1986年さらに改訂された）

注)2 吉沢美穂，
「教科書を使いこなす工夫」
p. 3

注)3 同上， p. 126

A. do does did will what time get go come eat

1. What time did you get up yesterday?

I got up at 7:00 yesterday.

2. What time will he come home?

He will come home at 4:30.

3. What time does your little brother go to bed every night?

My little brother goes to bed at 9:00 every night.

4. What time does she eat breakfast every morning?

She eats breakfast at 8:10 every morning.

5. What time did you go to school yesterday?

I went to school at 8:20 yesterday.

6. What time do you eat dinner?

We eat dinner at 7:30.

7. What time does he go to bed?

He goes to bed at 10:00.

B.

1. He gets up at 7:00 every morning.
2. He eats breakfast at 7:15 every morning.
3. He goes to school at 7:30 every morning.
4. He comes home at 3:30 every Friday.
5. He goes to bed at 10:30 every night.

Very Good

Date: 11/9 Name: ATSUSHI

N-29

メディア史上の Basic English(1)

片桐ユズル

Basic English の特色を知るのに、structure words において、どのような語が排除されているか見てみよう。

Both John and James were there.
John and James were there.

A dog has *neither* arms *nor* hands.
A dog has no arms or hands.

I had some food, and some wine, *too.*
I had some food, and some wine.

上の例で、both、neither、nor、too はBasicにない。論理的にはandか or があればわかるのだから、イタリックの語はいわばゼイタクであり、情報をふやすことに何の貢献もしていない。

このように、なかみと表現のズレに気がつくということは、紙の上に書いてみるとわかりやすい。ことばは、ものにつけた荷札みたいなものだ、というかんがえは、文字というものがなかったら、出てこなかったかもしれない。音だけの世界で、オグデンとリチャーズの「指示作用の三角形」をおもいつくことは、きわめてむつかしいことだろう。あのように視覚化してかんがえることは、無文字社会のひとにはできないことだろう。

ラフカディオ・ハーンは日本人が全体として文化的教養が意外に高いことに敬意を表しながら、独創性に欠けることに物足りなさを感じていたと、作家の藤沢桓夫は書いている（読売新聞1985年12月9日夕刊）。たとえば当時の中学生は富士山について書かせると、まるで申し合わせたように、富士山は扇を逆さまにしたような形をしている、と書いてハーンをおどろかせた。富士山はこういうものだとのイメージを身近な大人から教えこまれていた、ということで文化のあるレベルが維持されるのだが、同時にそのようなキマリ文句が独創をさまたげていることをハーンは見た。これが口伝文化と書き文字文化の共存した当時の日本であった。

書き文字文化というのは、たとえば「そうろう文」というような文体が実際に話されることばと違っても、平気で存在した。書き文字は一種のメモであるから、話されるそのままを忠実に再現しなくてもよい。むかしの日本の知識人の漢文とか、中世ヨーロッパのラテン語とか、今でもわたしなどはしばしば英語でメモをとる。また、書道の発達した漢字文化圏では、書き文字が客観的な情報よりも、情報の送り手をあらわすということに気がとられたりした。いずれにせよ「言文一致」ということがいわれる裏には、言と文が不一致であることが気になってしかたなかったので、そういう気持ちは活字文化のものであるとおもう。

コミュニケーションのメディアはかわっても、ひとの気持ちは前の時代のものをひきずっている。伝統社会においては、物言いの仕方も文章のスタイルもきまっていたから、その定形を覚えることが教育であった。たとえばアイサツとか、good Englishでは不十分でbetter English でなくてはアカンとか、そういうことをうるさくいうのは伝統社会のなごりである。しかし、活字文化のひとは、そういうスタイルを通り越して、その向こうにある情報ということに興味をもつ。そういういみで、Basic English は活字文化的心性から生れたといえる。

それと同時に、Basicの誕生にとって、ラジオの出現がシゲキのひとつとなっていたことも知られている。その出来たてのラジオをうまくつかいこなしてヒトラーはナチズムをひろめた。オグデンもリチャーズも、ラジオにのせても誤解なく、わかりやすい英語を考えた。Basicをつくるにあたって、たとえば［ｐｉ：ｓ］とい

う音はpeaceでもpieceでもありうるから、平和のpeaceをのこし、かけらのpieceはbitでいうことにした。親切のkind をのこし、種類はsort であらわすことにした。左のleft はのこされたが、過去分詞のleft はのこされなかった。

音のメディアにのる場合に、もうひとつ考えるべき点がある。たとえば、コンピュータは、技術の進歩により、果てしなく小さくなり得る。しかし、あまり小さくなると、文字盤が読み取れないとか、指でボタンをおすときに間違いが起こりやすい、とかの問題があらわれてくる。耳でことばを聞く場合に、紙の上の文字の場合よりも2倍だか3倍の長さが必要だ、とどこかで読んだ覚えがある。一見、無駄で冗長に見える文が、耳のコミュニケーションの場合は、文の一部分が落ちこぼれても、どこかに救いがのこっている。たとえば、

Both John and James were there.

の文では、うっかりして" Both " を聞き落しても" and "があるから、すくわれる。あるいは逆に、" and "のところをぼんやりしていても" Both "があったから、やっぱりふたりだったんだな、とおもう。さらに" were "というところでも、複数について喋べっているのだな、という手がかりがある。だから、both , either, neither, nor, too, also などは、コミュニケーションの安定感のための役わりをはたしている。

Redundancyということでいえば、われわれ日本人の学習者に苦手の3人称単数現在形などというものは、なくてもいいものだ。

He goes to school everyday.

行くのは Heだということがわかっているのだから、動詞でまたgoes というのは余分な反復である。さらに、時をあらわす副詞があったら、動詞で時をあらわすのは二度手間であるとさえいえる。

He go to school everyday.
He go to school tomorrow.
He go to school yesterday.

論理としてはこれでつながるはずだが、どうも、もうちょっとツッカイ棒がないと不安定な感じが、英語になれたひとには、あるかも知れない。中国語は、文法的反復の要素が、非常にすくない言語だと、どこかで読んだ覚えがある。そのため、かえって、コンテキストにたよることが多くなりすぎて、古典の場合など、「解釈」ということが特別に大変なことになったそうだ。コンピュータの便宜のために、いろいろなことが数字化されている現在だが、そのなかには情報に直接関係のない数字がいくつか入れてあって、間違いの起こるのを防いでいる、とか聞いたことがある。

最後に英語に対してイタリア語を比べてみると、文中の一語一語が単数 / 複数、男性 / 女性の信号を点滅させている。

Questo	è	il	mio	capello.
男・単	三単	男・単	男・単	男・単
Questa	è	la	mia	testa.
女・単	三単	女・単	女・単	女・単
Quelli	sono	i	vostri	capelli.
男・複	三複	男・複	男・複	男・複

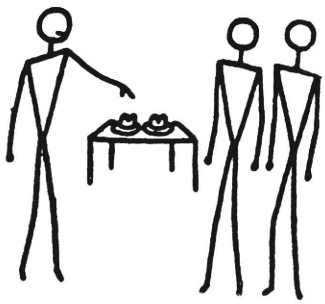
英語はThis is ……とはじめたら、その文のおわりに a man が来ようが、a womanが来ようが、かまわない。英語は考える順番になっているのだ。まずはじめにactor がいて、actionを起こし、それがobject に及んで、goal にまで達する。その例はI am putting my book on the table. で、こういう文はリチャーズによれば" primitive lucidity "があり、だれでもすぐにわかる、ということだった。英語の文章はコンベアー・ベルトみたいなもので、しかるべき順番で、すきな物をのせていけば、自然に欲する作文ができると、こんなふうにおもっていた。

それに対して、イタリア語の場合は、最後に

Questa è la mia testa.

Questo è il mio cappello.

Quelli sono i vostri cappelli.



くる語が、男性 / 女性、単数 / 複数がわかっていないと、最初の一語も発せられない。英語の open ending に対して、closed な感じである。しかし一方で、イタリア語はよく響きあう — これはマクルーハンのいう " acoustic space " というものを伺わせるような気がする。ひとつの仮説：イタリア語とかドイツ語の方が、より口伝文化のなごりを多く持ち、それに対して英語は活字文化的につっぱしっている。（かつていわれたように、言語は進化するほど analytic になり、英語はその点で一番すすんでいる、という説は今はとらない。）もうひとつの仮説：まずはじめに［だれそれのボーシ］というような「観念」みたいなものがあり、それと、それぞれの国語のルールに従って、言葉にしていくだけだから、特に英語が open ended なのでもなく、英語でも日本語でも、言いたいことは最初からきまっている。

Walter J Ong, *Orality and Literacy : The Technologizing of the word* (London & New York : Methuen, 1982) を読んで、Basic English をメディア史上に位置づけたくおもって、その第一歩を書いてみた。オングの本はメディアについてのマクルーハンの直感を実証する最近の業績をまとめて整理した好著である。

Alfred Korzybski : Science and Sanity (1933) の Basic English 訳

by 片桐　ユズル

We are not fully conscious of the great degree to which we are controlled by the use of our everyday language. It is not an overstatement to say that we are in a " prisonhouse " structured by our semantic reactions, the way of our reactions to "signs " in a wider sense. In other words, the unconscious working of the language upon us is so great that what we see as " the world " is pictures of the structure of the language automatically sent out of our mind into the space round us.
The power of language is so great that even among the experts in science whom I come across, no one is free from being tricked by the unseen structure of the language and his old conditioning to it.
Even if he sees some argument as true, he says, a minute after, something quite opposite in effect, or gives no attention to what he has said before, which commonly takes place unconsciously. (pp. 90 -91)

G.D.M 関西で20年！

斉藤　直美

ＧＤＭ関西でもう20年！だなんてと驚いていると、萬谷さんが、「関西で古いのは斉藤さんだそうですから、エピソードを書いてください」と、私をまるで生きた化石のように言って、原稿を依頼されました。

振り返ってみると、私が松蔭女子学院大学を卒業して、アシスタントとして、土佐堀の大阪ＹＭＣＡに入ったのは１９６７年４月でしたからひと昔以上も前なのです。当時小学生英語科（ＧＤＭ）クラスは、大阪ＹＭＣＡの屋上に増設された教室を集中コースと共有して使っていたので、よく授業が始まるずい分前からやって来て遊んだり、話している子供達の声がやかましいと苦情がきたものでした。

講師は、ユズルさんと岡部さんの２人だけで、教材はすべて自前でしたから、絵や写真、カード、ワークシートにいたるまで全部手作り、ユズルさんや岡部さんのバッグの中には、そのつど授業に必要な教材がいろいろ入っていて、生徒達のみならず、授業を見学している私にとっても、今日は一体バッグの中から何が、どんな絵や写真が出てくるのだろうと興味津々でした。

教室には周囲の壁に荷物をのせるshelfと、その下にhooksがあり、ＧＤＭのクラスではいろいろ利用（on, off, take, put など）できて便利でした。この頃の授業では、ＥＰのテープと同じくらい、ＥＰの絵だけと本通りの絵と文が入ったロールフィルムが、プロジェクターで見せてよく毎回の授業で使われました。ＥＰそのままの絵だけは、生徒に自由にいろいろ言えることを練習させるのにもってこいでした。

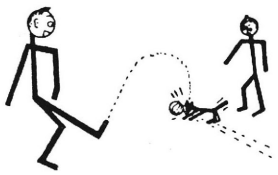
ユズルさんと岡部さんのクラスを交互に見学することができたのは、教え方だけでなく、授業や教材のいろいろのアイディア、生徒の反応など、とても多くのことを学ぶ場となり、私のＧＤＭの財産となりました。John Holt の *How Childeren Fail* は、class observation note をもとに書かれていますが、class observation は、セミナーやトレーニングに等しく、絶好の勉強の場を与えてくれます。そして、いろんな違う視点から見る目をも養ってくれます。大阪ＹＭＣＡでのclass observation system はその後もずっと続けられました。

大阪ＹＭＣＡのＧＤＭクラスは翌年から、年々クラス数、講師も増え、また、豊中ＹＭＣＡ（大阪北ＹＭＣＡ）、堺ＹＭＣＡにもＧＤＭクラスができ、合同勉強会、読書会も行われるようになりました。

この頃からＧＤＭ News の印刷部数も増え、講師の集まれる人が集まってみんなでNewsの発送をし、その後よくmonthly meetingが開かれるようになりました。これがＧＤＭセミナーやトレーニングが活発になるにつれ、openな形の月例会に発展していきました。

思えば長い道のりの20年、でも過ぎてしまえば短い。

He gives his friend an account of what he will do.



He did not take into account what the dog would do.

－Basic Step by Step (C.K.Ogden) より－

ー新刊書紹介ー

Linda M.L. Khan, Basics of Phonological Analysis: A Programmed Learning Text. (Pp. xvit266. College-Hill Press, San Diego, 1985.)

子供は、試行錯誤をくり返しながら、母国語の体系を習得する。Paul Menyuk, Sentences Children Use (M.I.T., 1969); Carol Chomsky, The Acquisition of Syntax in Children from 5 to 10 (M.I.T., 1969); Lois Bloom, Language Development : From and Function in Emerging Grammars (M.I.T., 1970)などは、子供の言語発達のうちで、統語論を扱ったもので、今ではもう古典といってよい。また、David Crystal, Child Language, Learning and Linguistics (Edward Arnold, 1976) は、音韻、文法、意味論、社会言語学の面から見た言語発達が中心となっている。音韻に関するものとしては、たとえば、Neilson V. Smith, The Acquisition of Phonology : A Case Study (Cambridge University Press, 1973); Pamela Grunwell, Clinical Phonology (Croom Helm, 1982) があげられる。

さて、音体系も、子供は様々な試行錯誤をくり返しながら習得する。1960年代後期から1970年代前期にかけて、speech pathologistたちは、言語学の成果を臨床に大いに応用しはじめた。子供は、音体系のコントラスト、クラス、パタンといったものに注意しながら、母国語の音韻体系を解読し、その知識を徐々に広げつつ自分のものにしてゆく。この時期に、成人のもつ音体系とはことなった解釈が行われ、子供独自の音体系が段階的に生じてくるのである。それは種々の音声現象として現れ、その現れ方には規則性がある。ある音声現象と、それとは異った音声現象には、現れ方にきまった順序があり、お互いにオーヴァラップしながら、次の音声現象に移ってゆく。

本書は、子供に見られる種々の音声現象を、その現れる順に具体的に記述してゆく。たとえば、hat / hæt /, cup/kʌp/ を[hæ], [kʌ] と発音する段階がある。これは末尾子音削除 (deletion of final consonant) と呼ばれ、初期の段階である。次に見られるのは、母音直前の子音の有声化 (prevocalic voicing)で、talk / tɔk /, cup/kʌp / が[dɔk], [gʌp] となる段階である。Khanは、ノーマルな言語発達過程において、このような13の段階を設定している。

この本はワークブックである。読者は練習問題にあたりながら、子供の言語発達の過程を追うことになる。問題は平易なものばかりで、しかも同じことが形をかえてくり返し現れるので、ノートに答を書きながら読み進んでゆくと、音声学に関してもかなりの量の知識が得られるようになっている。一通りの知識が頭に入ると、子供の発音なり、方言なりを耳にしたとき、ああこれはあの現象だと思いあたることが多いにちがいない。

著者のLinda M.L. Khan は University of Texas at Dallas のCallier Center for Communication Disorders 所属である。なお同著書による、本書の姉妹編Applications of Phonological Analysis : A Programmed Learning Text (pp. vxiit 255) もある。発行所、発行年は本書に同じ。

(中郷 安浩)

活　動　報　告

（1984年9月～1985年8月）

ＧＤＭ英語教授法セミナー（東西支部合同）
3月26日（火）～29日（金）大阪ＹＭＣＡ
六甲研修センター　受講者44名
8月18日（日）～21日（水）日本ＹＭＣＡ
同盟東山荘　受講者58名

公開講演会

〈東日本支部〉

6月15日(土) 労音会館　参加者120名
「やさしく、わかりやすく英語を書くとは？」室勝：「Graded Direct Method（ＧＤＭ）そのポイント」東山　永
体験授業その1：島谷靖子(Hindi)、近藤悠子（Arabic）、岩宮節子（Swedish）；体験授業その2：疑問文　新井等、一般動詞三時制の導入　竹内久枝、現在完了　吉沢郁生

〈西日本支部〉

6月22日(土) 日本進研ゼミナール　90名
「人称代名詞の指導について」織田稔、「ＧＤＭの基礎理論」小高一夫；　体験授業その1：片桐ヨウ子（Spanish）、迫田久美子（Korean）、昆布孝子（Chinese)：体験授業その2：" take " 高橋修子、" keep " 原田弘、" where, rel. " 住広寿子

月例研究会

〈東日本支部〉

9月29日(土) 東京都教育会館　42名
3:00～5:00 （総会；Teaching：see(s)，do (es) not　see　丹野裕子、some（all，no）　桑田ふく子）
10月27日(土) 横浜アカデミー　46名
3:00～5:00 （成人クラスの授業（taking，was）菅生由紀子；「〈一般意味論セミナー・ワークショップ1984〉に参加して」柳沢康司）
11月17日(土) 婦選会館　48名
3:00～5:00 （小学生の授業（Where …？）小松典子；「日本におけるBasic Englishの歴史とその周辺について」梅本裕）
12月15日(土) 豊島区立勤労福祉会館　37名
3:00～5:00 （have 竹内久枝、how 関係副詞、use 藤原妙子；「英語教育改善懇談会の報告」安西聖雄）
1月19日(土) 葛飾区立新小岩社会教育会館
3:00～5:00 30名（There is（are）～中村吉見、was，did not see，Did… see？　降旗富子；「英語のIntonationについて」土居恵子
2月16日(土) 杉並産業館　43名
3:00～5:00 （小学生の授業（these，those）黒沢八重子；「私たちは何を目標として英語を教えているのでしょうか」司会：安西聖雄）
3月16日(土) 豊島区立勤労福祉会館　43名
3:00～5:00 （make 浅田恵子、keep 柳沢康司；「Mind，Thought，Idia，Knowledge について」小川和子）
4月27日(土) 早稲田大学　57名
3:30～5:30 （what，rel.　東山永、seem 佐藤正人；「Everyone's Englishの構想」牧雅夫）
5月22日(土) 港区立赤坂中学校　34名
2:30～4:50 （中学一年生のクラス（in，on）箕田兵衛；「私の一般意味論」佐藤由美子）
7月13日(土) 豊島区立勤労福祉会館　46名
3:00～5:00 （小学生の授業（were）山本佳子、What is blood？　山田初裕）

〈西日本支部〉

9月22日(土) 神戸学生青年センター　11名
2:00～5:00 （談話会「〈評価の視点から見たＧＤＭ〉を読んで」司会：萬谷隆一；different，same，sort，

高橋修子；総会）

10月28日(日) 神戸市立葺合文化センター 21名
1:00～4:00 （「英語のいくつかの話題について」水鳥喜喬；that節 川上伊都子、before，after 福本洋）

11月11日(日) 梅田第2産経学園 11名
2:00～4:30 （My Ireland 中郷安浩：Where …？ 植田友子）

12月9日(日) 名古屋サンプラザ 33名
2:30～4:30 （英作文 室 勝；if 山田初裕）

1月20日(日) 緑地理数教室 11名
2:00～5:00 （「なんで英語やるの？—英語教育改善懇に参加して」大塩直也；of 安部文敏、let 萬谷隆一）

2月17日(日) 日本イタリア京都会館 27名
2:00～5:00 （「GDMはなぜおもろしいのか—教授学の立場からの検討」梅本裕；make メイヤーさよ子）

4月21日(日) 緑地理数教室 21名
2:00～5:00 （ディスカッション「GDMの授業の組み立て方—授業をするためのヒント」司会：萬谷隆一、レポーター：メイヤーさよ子、植田友子、安江祐子；which，rel. 水谷広子、take 松田さがみ）

5月19日(日) 西大寺YMCA 14名
2:00～5:00 （spanish 片桐ヨウ子、Chinese、昆布孝子、take 高橋修子；実践報告：斎藤成人、中原敦）

7月14日(日) 日本イタリア京都会館 23名
2:00～5:00 （仮説実験授業（理科）高橋道比己；Yes，No Question 川上伊都子）

その他
上級セミナー（東西支部合同）
12月8日(土)～9日(日)
名古屋サンプラザ 参加者22名

❁編集後記❁

今号のテーマは、「検定教科書とGDM」でした。検定教科書を使っている学校でGDMを使う場合、教材配列にズレがあるために、いろいろな障害が生じます。今回寄稿された方々は、それぞれに意見を持ち、工夫を重ねながら実践を積まれています。同じような問題をかかえて、奮闘されている先生方のお役に立てば幸いです。

斉藤直美さんが書いておられるように、東日本支部よりは少し遅蒔きながら、西日本支部も今年で満二十歳になりました。この研究会を大切にここまで育て、支えてきて頂いた方々に深く感謝いたします。

二十歳といえば、心身ともに変化の激しい頃。決して同じ場所にはとどまらず、どんどん伸びて行く時期です。私たちもどんどん変化して、伸びて行きたいものです。歴史を大切にしながらも、それにとらわれることなく。 （萬谷）

GDM

SUMMER SEMMINAR, 1986

期 間：1986年8月18日(月)～21日(木)
場 所：日本YMCA同盟東山荘
静岡県御殿場市東山
定 員：一般セミナー … 40名
中級セミナー … 20名
上級セミナー … 20名
受講料：申込金 ¥5,000
受講費 ¥27,000
宿泊料：¥21,000（3泊4日食事つき）
申込先：〒543 大阪市天王寺区南河堀9－52
大阪南YMCA GDMセミナー係
電話（06）779－8361
（内線 39）
しめきり：7月25日 ただし、定員に達し次第締め切りますので、電話で申込状況を確認の上お申し込み下さい。